



写真「生物多様性シリーズⅡ」  
目野菜

地域でのフィールド調査・研究の情報

## 近江の博物学者 橋本忠太郎

### — 植物研究にかけた情熱 —

滋賀県は日本列島の真ん中にあり、東や西のもの、北や南のものが入り混じり、高い山はありませんが、周りは山に囲まれ、また低湿地や湖もあって、植物の種類が豊富な県です。その滋賀県の植物相（滋賀県の植物にどんなものがあるか）を明らかにしようとした人がいます。明治以降、リンネに始まる植物分類学の知識、方法が日本にも紹介され、標本に基づいて実証的に、滋賀県の植物相を明らかにしようとしたのが、今回ギャラリー展示で紹介する橋本忠太郎さんです。

彼は 1886 年、日野町の十禅師に生まれ、幼い頃から植物が好きで、県立彦根中学校を出て、地元、西大路小学校、必佐小学校の教員となりました。当時集めた明治時代の標本がその学校から曾孫の橋本泉さんによって見つかっています。その後滋賀県師範学校を卒業して、滋賀女子師範学校の博物学の教員となりました。



橋本忠太郎と収集物

この頃から、本格的に標本に基づいて滋賀の植物を調べ始めました。たくさんの日本の植物に名前をつけ日本植物図鑑を著した牧野富太郎博士や、京都大学の多くの植物学者達（小泉源一博士、田代善太郎氏、大井次三郎博士、田川基二博士、北村四郎博士等々）と交流し、教えを請けました。また、約 3 万点もの植物標本を集め、多くの新種の植物発見の元となった標本（タイプ標本）を採取し、近代植物学の発展に大きく寄与しました。彼の集めた標本は京都大学総合博物館、国立科学博物館、大阪市立自然史博物館、琵琶湖博物館などに数多く收藏されています。彼は郷土の植物誌を作る目的で、近江の植物に限って標本を採取し、2,150 種からなる近江植物標本目録を作っていました。残念ながら道半ばにして 1960 年、74 歳で亡くなりましたが、その遺志を継いで京都大学の北村四郎博士が、1968 年に『滋賀県植物誌』を著しています。

今回の展示は、自宅に残された約 2 万点を超える植物標本が琵琶湖博物館に寄贈されたのを記念して開催するものです。その中には、すでに絶滅したと思われるオウミコゴメグサ (*Euphrasia omiensis* Y.Kimura ex Hara) があ



サヤマスゲ  
(*Carex hashimotoi* Ohwi)



オウミコザサ  
(*Sasa hashimotoi* Koidzumi)

ります。1925年9月26日に比良山で初めて橋本忠太郎さんが採集したことがもとで新種記載となりました。標本としては、これまで、京都大学に2本、国立科学博物館、大阪自然史博物館に各1本ずつしかなく、その後採られていません。今回その貴重な標本が、自宅で発見されました。また飯道山において採集したサヤマスゲ (*Carex hashimotoi* Ohwi) は、学名に橋本を記念した名前がついています。その他カンサイエノキ、ヤマサワシロギクや、オオミコザサ、カモンシノなどたくさんのササ類でも新種記載の基となった標本を採集しています。ほかにも、今では滋賀からは絶滅したと思われるガシャモクや、マルバノリクラアザミなど希少な植物も採集しています。

また、自分が採集した経路を赤線で入れ、6,000もの採取した植物の位置を点で記入している県内の地形図が残されています。当時、綿向山で採集した場合、多くの人が綿向山とだけしかラベルに記さなかった時代に、かなりの数の植物の正確な位置を記録しようとしたと思われます。

1936年近江博物同好会を立ち上げ、滋賀県各地にて採集会を行い、植物だけでなく、鉱物や昆虫、貝などについても取り上げ、1号から16号まで研究会誌を発行しました。このような活動を



鎌掛のホンシャクナゲ  
(*Rhododendron japonheptamerum* Kitamura var. *hondoense* (Nakai) Kitamura)

通じて滋賀県の博物誌の研究を行ない、多くの教育普及活動もされています。

また、長らく、滋賀県天然記念物調査員を委嘱され、日野町鎌掛のホンシャクナゲ群落や霊仙山のフクジュソウ群落等を新たに調査しています。

今回の展示では、植物調査に情熱を傾け、県内あちこちを採集された足跡をたどるほか、調査中のちょっとかわったエピソードやハプニングなども紹介します。明治、大正、昭和に見られた豊かな滋賀の植物やその変化にふれていただけたと思います。是非、ギャラリー展「近江の博物学者橋本忠太郎—植物にかけた情熱—」(2013年4月2日～6月9日開催)に足をお運びください。(専門学芸員 草加伸吾)

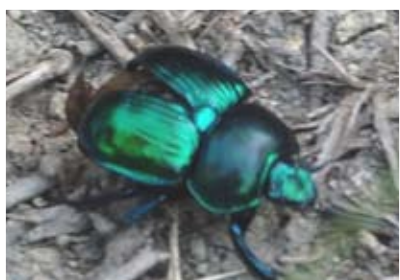
## どこでもだれでもフィールド情報 里山でのすばらしい発見

私は、はしかけ「里山の会」メンバーとして10年以上にわたり琵琶博に関わっています。活動は野洲・日野・堅田周辺などの里山が中心で、学芸員や体験教室に参加した皆さんと自然を満喫しています。普段はめったに出会えない宝石のような「ミドリオオセンチコガネ」や、黄金に輝く「セモンジンガサ」、そしてハート模様を持った「エサキモンキツノカメムシ」などを見つけた時は、昆虫標本にはない美しさにはっと驚かされます。また、子供たちのすばらしい感性や才能に接する

ことが良くあります。

先日、冬枯れのエノキの根元周りで丹念に何かを探している小学一年の少年にめぐり合い、話を聞くとゴマダラチョウの幼虫を探しているとのこと。しばらく一緒に探していると枯葉の裏に蝶の幼虫とは思えない生物を見つけました。まさにこれがゴマダラチョウの幼虫だとこの少年に教えてもらいました。幼虫を発見したことよりこの幼い少年に教えてもらったことに感激しました。

また、ある時、里山で花炭(木の実、花、果



ミドリオオセンチコガネ



セモンジンガサ



エサキモンキツノカメムシ

物など素材そのままの形で炭化させてつくる炭)作りをしたとき、セミの脱け殻を見つけた少年が、「これも炭になるのかなあ」と言ってきました。最初は燃え尽きてしまうと思っていまし

たが、とりあえず、小さな缶に籾殻、ドングリ、葉っぱと一緒にセミの脱け殻を入れ焚き火の中に放り込み炭にしました。缶のふたをあけ、中身をだすと青紫に輝く炭になったセミの脱け殻

が現れてきました。少年はもちろん周りにいた大人たちも、その美しさに感嘆の声を上げました。大人では思いもしない子供の発想に驚かされました。もちろん、その後の里山での花炭づくりではセミの脱け殻は定番の材料になったことは言うまでもありません。(はしかけ「里山の会」吉井隆)



ゴマダラチョウの幼虫



セミの抜け殻の花炭

## どこでもだれでもフィールド情報 皆さんのお手伝い役 環境学習センター

環境学習と聞くと、「ちょっと難しいなあ」って思われる方もおられるかと思います。しかし、少し難しいイメージを「近くの川で子どもたちと魚つかみをしたいなあ」とか「省エネってどうしたらええのん?」、「地域のエコな人を学校や自治会に呼んで何かしたいなあ」と具体的な言葉にしてみましょう。具体的なイメージがつかめてきたら、早速、私たち環境学習センターがお手伝いします。何をしようかと考えるところからの相談もお待ちしています。

先日、ある中学校の地域学習をお手伝いしました。大津市の堅田を中心として、農、琵琶湖、森林、環境保全などの仕事をしておられる方や活動団体を訪問し、その仕事ぶりや活動の思いを聞き、体験活動もしながら学んだことを班毎にまとめて発表するものでした。センターはその準備として、体験先の活動団体の紹介をさせていただきました。そして当日の様子からは、中学生は各活動を知ることを通じて、今、自分たちの住む環境について、考えることが出来たように思えました。

皆さん、是非一度、環境学習センターのホームページ「エコロシーガ」を検索してみてください。そこには、今回の学習で紹介したような様々な活動団体や専門家が、協力を申し出て、登録されています。「滋賀ってこんなに人材や団体、施設があるんだ!」「環境学習のプログラムってこうやればいいんだ!」と、環境学習の広がりや深さを感じてもらえると思います。そして、その人たちと協働して皆さんの環境学習や行動を実践してもらいたいです。(環境学習センター 池田勝)



船大工さんから丸子船の技を教わる



昔の道具に触れて感じる体験



地域の専門家と川の生きもの探し

## ミュージアムショップへ「おいでや」

皆さんは、ミュージアムショップを利用されたことがありますか？当店では、博物館の展示に関するものと琵琶湖や滋賀に関わりのあるものを2本の柱として、50点以上のオリジナル商品やこ



ショップ内の様子

だわりのある商品展開を心がけています。

滋賀の写真家である今森光彦さんの切り絵グッズや、当館と相互協力関係にあるパリ自然史博物館のミュージアムグッズ、化石・鉱物は500種以上、アユやヤマメの陶器の置物などなど。どれもここでしか購入できません。



プレゼントにも大人気！  
ビワコオオナマズ

買っていただくことはもちろん、見て楽しんで、手にとってわくわくしていただくために努力の毎日です。最近、「このショップは楽しいから好き」、「全国の博物館の中でも好きなショップの一つ」、「滋賀のものを一番発信している」などのうれしいお言葉をいただき、博物館の一部として定着してきたかなと思います。

当店は、観覧券を購入しなくてもご利用いただけますので、是非ご来館ください。(ミュージアムショップ「おいでや」店長 森薫)

### 【資料裏話 その8】 匠の技！江戸の観光ガイドマップ



近江国大絵図より

江戸時代の近江(滋賀県)は、東海道・中山道をはじめ、北国街道・若狭街道などが通る交通の要所でした。伊勢参りや西国巡礼の一大旅行ブームがわき起こり、名所旧跡を紹介する案内絵図は旅人の必須アイテムでした。

写真は、堅田の浮御堂で知られる満月寺が安政3年(1856)に刊行した『近江国大絵図』の奥嶋付近です。「此嶋、近江国ノ中央二当レリ」の記載どおり、大中の湖が干拓されるまで、近江八幡市奥島地区が琵琶湖に浮かぶ島であったことを示しています。(囑託職員 渡邊潤子)

#### ● 編集後記 ●

この冬は、雪模様がつづき、気温の低い日も多かったですね。そのためか、雪慣れしていない地域でのトラブルや歩行者が路面で滑った映像が伝わってきました。凍った雪道を歩く経験がないことも一因です。なにごとくも体験学習が大切だということですね。(てら)

#### 鳥の目 魚の目 クイズ

##### ● 「受け継いでいく野菜たち」 ●

日野菜のように、各地で地域独特の野菜が育てられ、食べられてきました。これらを総称する呼び名は何でしょうか。

- ① 伝説野菜
- ② 伝統野菜
- ③ 伝道野菜

答えは、紙面のどこかにあります。

#### ◆ 巻頭写真の説明 ◆

日野菜は、滋賀県の日野町が発祥とされている伝統野菜です。県内にはこれ以外にも、下田ナスや伊吹ダイコンなど地域の名称を冠した伝統野菜があります。昔からの品種を守って、使い続けていくことが固有種を守り、生物多様性にとっても大切な事です。